



日本精鈇 木嶋正憲社長

三酸化アンチモン国内最大手の日本精鈇は今年、創業80周年を迎えた。現中期経営計画(2013-15年度)最終年度の今期は、金属粉末事業で上期の過去最高業績を達成した。しかし、足元ではアンチモン相場の下落など事業環境は厳しさを増しつつある。木嶋正憲社長に現状と今後の方針を聞いた。

「上期を振り返って、相場下落と販売数量の減少の影響を受けた。アンチモン事業は、4-6客が様子見ムードになっている。回転在庫分の単価が高くなるので利益を圧迫する。販売数量も多少落ちたが、アンチモン事業の業績が悪化した主因はそこにある」

「金属粉末事業は上期としての史上最高売上・利益を達成した。今年は大

トップに聞く Interview

大きな落ち込みはないが、アンチモン事業では相場下落の影響が大きい。顧客がギリギリまで調達を抑えるようだと厳しいが、化学品業界などは悪くない。国内の自動車生産は減少傾向にあるが、電装化で部品点数が増え、それほど数量は落ちていない。中国の景気がどのように入ってくるかも鍵となる」

「金属粉末も顧客に越えて出荷が落ちると思っていたが、日系電子部品メーカーが健闘しており堅調な需要がある。粉末冶金の軸受関係の粉末も自動車部品生産の国内回帰の影響もあり、上期は堅調に推移した」

「下期の見通しは、数量的にはそこまで顧客によっては下期の方が良くなりそうという声もあり期待したい」

「中国支社の状況は、実質的に2年目だが、月次ベースで黒字になる月も出てきた。1-12月通期では昨年より赤字幅が縮小し1000万円以下まで改善する見込みだ。販売数量は1-6月期で平均55%と昨年から1割強伸びた。日系ユー

「私が就任した11年のアンチモン相場はトン1万7000だった。今は、分の1まで下落しているが、鈇山投資という意味ではチャンスだ。理想として鈇山から一貫で生産したいという考えがある。中長期ビジョンを達成するためにそうした事業も手掛ける必要がある。実際に中国以外の生産者から具体的なオファーも来ており、検討する価値はある。中国を含め生産者の再編が進めば残存者利益も期待できる。現在は鈇山開発に関して人材やノウハウが足りないので蓄積していきたい」(芳賀 陽平)

ニーズ先取りの継続

鈇山権益投資も検討余地

「鈇粉のラインについて溶解量で月50%のフル生産が続いている。建設中の倉庫棟は来年1月末の完成予定が前倒しで進んでいる。倉庫棟の新

「鈇粉のラインについて溶解量で月50%のフル生産が続いている。建設中の倉庫棟は来年1月末の完成予定が前倒しで進んでいる。倉庫棟の新

「鈇粉のラインについて溶解量で月50%のフル生産が続いている。建設中の倉庫棟は来年1月末の完成予定が前倒しで進んでいる。倉庫棟の新

「鈇粉のラインについて溶解量で月50%のフル生産が続いている。建設中の倉庫棟は来年1月末の完成予定が前倒しで進んでいる。倉庫棟の新

「鈇粉のラインについて溶解量で月50%のフル生産が続いている。建設中の倉庫棟は来年1月末の完成予定が前倒しで進んでいる。倉庫棟の新